ヨハネによる手紙第一2章24－25節 「初めから聞いていること」

1A 留まる命令 24

1B 初めに聞いたことの大切さ

1C 堅く根ざす勧め

2C 教えの風

3C 新しい啓示という惑わし

4C 最後までの信仰

2B 御子の内に守られる自分

1C 御父と御子が住まわれる約束

2C 主の現れの時に受け入れられる保障

2A 永遠のいのちの約束 25

1B 約束の確かさ

2B 永遠のいのちを持つ者

3B 長さ以上の命

本文

ヨハネによる福音書第一２章を開いてください、今晩は 24-25 節をじっくり見て行きたいと思います。「24 あなたがたは、初めから聞いていることを自分のうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。 25 これこそ、御子が私たちに約束してくださったもの、永遠のいのちです。」

ヨハネがこの話をしているのは、18 節からです。「幼子たち」と呼びかけていますが、信じて間もない人たち、神によって生まれ、まだ成熟していない状態です。そういった人々に、今は終わりの時であって、反キリストが大勢現れているということを強調しています。そして反キリストとは、イエスがキリストをであることを否定する者であって、御子を否定している者だとヨハネは教えました。ここで大事なのは、あからさまにイエスはキリストではないと否定するのではないのです。これこそが大事な知識であると教え、その知識を得ることが救いであるように教え、結果としてイエスではない、他のものや、他の人物が救い主であるようにさせていきます。そうやってイエスにこそ、命があるということを否定しているのです。

1A 留まる命令 24

そこで、使徒ヨハネは幼子に対して、教えているのは、「あなたがたは、初めから聞いていることを自分のうちにとどまらせなさい。」と言っています。この初めから聞いていることは、ヨハネが第一の手紙の中で語っていることです。「1:1-2 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。この

いのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。」このことが、初めに聞いていることですね。イエスが神の御子であり、この方に永遠のいのちがあるということ、これが初めに聞いていることです。

1B　初めに聞いたことの大切さ

私たちは、自分の知識というのは、不確かなもので、日々それを新たにしていかなければいけないという強い流れがあります。キリスト者になって、信仰によって生きていく中で、新たな課題が与えられます。そしてそれに対応するのに、今まで知らなかった新しい知識が与えられ、それを知らなければ信仰の歩みが十分なものではないと感じます。こういった考えで、最も誤っていることがあります。こう言ったら分かるでしょう。「お父さんについて、新しいことが分かったら、違うお父さんに取り換えるの？」ということです。自分が生まれた時から、お父さんはお父さんです。お父さんのことを成長すればよく知っていくことはあっても、その関係は初めの時から変わりません。むしろ、父と子の関係を大事にすることによって、父を知ることになるのであり、新しい知識に取って替わるものではないのです。ヨハネが語りましたね、「2:14 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが、御父を知るようになったからです。」聖書の言っている真理や知識というのは、あくまでも関係における真実であり、御子のうちにある関係のことです。

1C　堅く根ざす勧め

それで、聞いて信じたことに留まるということが、大切になります。ヨハネは、「自分のうちにとどまらせなさい。」と言いました。

信じたばかりの人たちに、使徒たちは、堅く立っていなさいということを何度となくいいました。アンティオキアにおいて、ユダヤ人だけでなく異邦人も多くが信じていったので、エルサレムからバルナバが遣わされ、その恵みを大いに喜びました。そして、こうあります。「使　11:23 心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。」心を堅く保つこと、いつも主にとどまっていることを教えました。パウロは、テサロニケから短期間で離れなければならず、残された新しく信じた人々が一体どうなっているのか、気が気でなりませんでした。誘惑する者、つまりサタンが惑わして、自分たちの労苦が無駄になってしまうのではないか？と思っていました。それでテモテを遣わしたのですが、彼らが愛と信仰と希望に満ちているのを知って、大きな慰めを受けています。そして、こう言っています。「Ⅰテサ　3:8 あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。」主にあって、堅く立つことです。コロサイ書でも、こう教えています。「コロ 2:7 キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」

そして、これは教師たちも同じで、パウロは若い牧者であるテモテに、このように命じました。「Ⅱテモ 1:14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」守ることなのです。

つい最近、ある方と話していて、自分が新しく信じたばかりのことを思い出しました。宣教師の方が、新しい信者のための教材を使って、その冊子の中に聖書は神のことばであることの説明がありました。信じたばかりの人が、鉄は熱いうちに打てという言葉があるように、その時に信仰の建て上げが重要になります。しばらくして、同じ教団の教会で、神学校を出た人が、私に対して創世記の 1 章と 2 章が違うことが書いているだろう？これは、書いている人が異なっていて、違う文献から来ているのだ、とか話してきたのです。私は、何を言っているのだろうか？と思って、「いいえ、矛盾していません。」と答えました。聖書は神のことばです。神のことばを理解できなくても、それは私の理解に限界があるだけで、神のことばではないという証拠にはなりません。ずっと後になって、頭の中でも全く矛盾しないことを整理することができましたが、それは、神のことばであるという信仰があったからこそ整理できました。初めに聞いたことを留まらせることの大切さがあります。

2C 教えの風

なぜ、しっかりと堅く保つ必要があるかというと、パウロの言う「教えの風」というものがあるからです。「エペ 4:14-15 こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」コロサイ人への手紙でも似たことを話しています。「コロ 2:4-5 私がこう言うのは、まことしやかな議論によって、だれもあなたがたを惑わすことのないようにするためです。5 私は肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたとともにいて、あなたがたの秩序と、キリストに対する堅い信仰を見て喜んでいます。」まことしやかな議論によって惑わす者たちがいるけれども、あなたがたは秩序を保ち、キリストに対する堅い信仰を保っていることを喜んでいます。

この時代にも、また今に至るまで、必ず人の悪だくみ、人を欺く悪賢い策略というものがあります。それは、そのようなことを教えている人々が、キリストのゆえに教えているのではなく、その御名を利用して、自分の欲に仕えているからです。自分自身に引き入れようとしています。パウロが、ガラテヤにいる偽教師たちのことについて、こう言っています。「ガラ 4:17 あの人たちはあなたがたに対して熱心ですが、それは善意からではありません。彼らはあなたがたを私から引き離して、自分たちに熱心にならせようとしているのです。」

3C 新しい啓示という惑わし

彼らは、初めから聞いていること、イエス・キリストの福音を何かそれだけでは足りないのだというところから、持って来ます。イエス・キリストの他にまだもう一つ何かがあるのだとするのです。ユダヤ主義のような律法主義においては、イエスへの信仰と、それに加えて数々の規則を守る必要があると教えます。グノーシス主義のような知識主義と呼んだらよいでしょうか、イエス・キリストを信じる信仰だけでなく、それ以上の知識が必要なのだ。隠された知識があるのだと言います。もちろん、知識を得ることは必要です。それを得てはいけないということではなく、目的が問題なのです。この方、イエスを知るための知識であるかどうか？なのです。コロサイ書には、「2:3 このキリ

ストのうちに、知恵と知識の宝が隠されています。」とあります。

パウロはテモテに対して、先ほど話したように、委ねられたものを堅く保つように教えていました。それは、知識をふりかざして論争に挑み、空想話に逸れて行ったりしていたからです。「Ｉテモ 6:20-21a テモテよ、委ねられたものを守りなさい。そして、俗悪な無駄話や、間違って「知識」と呼ばれている反対論を避けなさい。21a ある者たちはこの「知識」を持っていると主張して、信仰から外れてしまっています。」そして、テモテに対して語ったのは、「‥ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。」ということです。あまりにも単純で、そのまま受け入れるに値するものなのだということです。「Ｉテモ 1:15「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」「4:7-9 俗悪で愚にもつかない作り話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分自身を鍛錬しなさい。肉体の鍛錬も少しは有益ですが、今のいのちと来たるべきいのちを約束する敬虔は、すべてに有益です。このことばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。」敬虔のために鍛錬することです。

4C 最後までの信仰

私が以前、カルバリーチャペルの牧者たちのための会議、大会に参加した時、その時のテーマが、「完走する Finishing Well」ということです。多くの人は、信仰によって走り始めるけれども、そして始めの走りっぷりはよい人は多いが、最後まで走っている人たちはどれだけいるのか？ということです。パウロが、コリントの人たちにこう言いました。「Ｉコリ 9:24 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。」

聖書には、必ずしも信仰を全うした人たちばかりでないことに気づきます。ダビデが王として立てられる前、サウルがイスラエルの王でしたが、彼は勇敢に敵に戦いましたが、最後はなんと魔女に伺いを立てるというところまで落ちぶれてしまい、ペリシテ人に殺されて死んでしまいました。主の御声に完全に聞き従わずに、自分のやりたいように勝手に解釈して従ったからです。ソロモンもそうですが、主を愛している人でしたが、晩年、多くの妻とそばめを持ち、彼女たちが異邦人で他の神々を持ち込んだため、そのための宮をエルサレムに建てるのを許しました。心が全く主と一つになっていなかったのです。そのために彼の死後、王国は分裂し、北も南も偶像礼拝の罪によって滅んでしまいました。

新約聖書には、興味深い人がいます。デマスという人ですが、パウロの宣教旅行に同行していた人です。「コロ 4:14 愛する医者のルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。」デマスが、ルカと共にパウロの愛している同労者でした。そして、こうもあります。「ピレモ 1:24 私の同労者たち、マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。」デマスがピレモンへの手紙にも出てきます。ところが、パウロが殉教する直前に書いたテモテへの第二の手

紙にはこうパウロが書いているのです。「Ⅱテモ 4:10 デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました。また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマティアに行きました。」今の世を愛して、牢屋にいるパウロを捨てて、テサロニケに行ってしまったと言っています。

このように、初めから聞いていることを保っていることはとても単純ですが、しかし最後まで保っていることは、しっかりと堅く信仰を保っている必要があるし、忍耐を働かせる必要があります。日本語でその二つをかけ合わせて、「堅忍」という言葉があります。重い荷物をしっかりと背中にのっけて坂道を歩いていくようなイメージです。しかし、そこには大きな報いがあります。ヘブル 3 章にある励ましを読みます。「ヘブル 3:12-14 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。13 「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」

2B 御子の内に守られる自分

このように、しっかりと初めに聞いたことを自分に留まらせていれば、約束があります。「もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。」御子と御父の内に留まっていることができます。

1C 御父と御子が住まわれる約束

ここに、すばらしい恵みがあります。私たちは、自分がしっかりと努めなければ、救いから漏れてしまうのではないか、救いを失ってしまうのではないか？と心配するかもしれません。けれども、その心配はないのです、神ご自身が私たちがご自身に留まるようにしてくださるのです。私たちに必要なのは、しっかりと留まっていることです。「ヨハ 14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」御父と御子が、共に住んでくださるのです。住むというのと、留まるというのは同じ意味です。共に住んでくださることによって、私たちを守ってくださるのです。

2C 主の現れの時に受け入れられる保障

使徒たちはこのことを何度となく話しています。私たちがすることは、主を信頼すること、この方の言葉をとどめておくことなのですが、終わりの日にご自身の現れの時に、必ず守ってくださると約束があるのです。「Ⅰテサ 5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。24 あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」責められるところのないように保たれるように、という祈りをささげています。そうです、私たちは主にお会いする時に、責められるところのないような完全な聖なる者となるようにという祈りが必要です。自分では到底できないともちろん思いま

す、聖霊の満たしが必要です。しかし、神がそのようにしてくださると守ってくださるのです。

迫害下にあったキリスト者たちに、ペテロも励ましの言葉をかけています。そこでも、主が必ず終わりまで守ってくださると言っています。「Ⅰペテ 5:9-10 堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。ご存じのように、世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通ってきているのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」ここでも堅く立つことを勧めていながら、主が必ず堅く立たせ、強くし、不動の者とされるという約束があるのです。ユダの手紙でも、こう約束があります。「1:24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方、」

2A 永遠のいのちの約束 25

そして、御子と御父のうちに留まることこそが、「御子が私たちに約束してくださったもの、永遠のいのちです。」とヨハネは言います。

1B 約束の確かさ

私たちは、約束の確かさをどうしても疑ってしまいます。第一に、人間の世界では約束は破られてしまうものだからです。それで神は、契約という形で人と約束を守られます。これは、自分が約束をするだけでなく、自分自身を約束の中に縛るものだからです。契約とは、必ず履行しなければならないものであり、もししなければ、死を意味します。主が、アブラハムに、星の数のように子孫を与えると約束し、また彼にカナンの地を与えると約束した後に、今の我々が見ると不思議なことをされました。(創世 15 章参照)それは、三歳の雌牛、雄山羊、雄羊と、山鳩を用意して、それらを真っ二つに切り裂き、半分を互いに向かい合わせにしました。鳥は切り裂くと、ぐちゃぐちゃになるので、切り裂きませんが、なぜそんなことをさせたのか？これは、当時の契約の結び方なのです。双方がその間を通り、「もし契約を破れば、これらの牛、山羊、羊、鳩のようになる。」という意味を持っていました。そして、驚くことに、主は、煙の立つ竈と、燃える松明をもって、切り裂かれた物の間を通り過ぎられました。アブラハムは通っていません。そして、エジプトの川からユーフラテス川まで、あなたの子孫に、この土地を与えると約束されたのです。主が一方的に、この約束を契約として結ばれて、それを必ず履行されるのです。

私たちが約束について疑ってしまう理由は、第二に、途方もない、できっこない約束に見えれば、それは無理だ、約束は破られると思います。けれども、そのことについて神は、ご自分の全能の力で実現させます。再びアブラハムについてですが、彼が 99 歳、妻のサラが 89 歳の時に、サラから子が生まれ、来年の今頃、子が与えられると約束されました。(創世 18 章参照)サラは、心の中で「18:12 年老いてしまったこの私に、何の楽しみがあるでしょう。それに主人も年寄りで。」と言った時に、主は、「18:14 主にとって不可能なことがあるだろうか。」と言われたのです。その後、アブ

ラハムは約束を信じて疑わず、まだ子が生まれる前に神に栄光を帰していました。主にできないことは何もないからです、全能の神だからです。そして今や、神はご自分の御子イエスを、死者の中からよみがえらせたことによって、この方の約束は確かであり、永遠のいのちの約束も確かであることを明らかにしていくださいました。（ロマ 4 章参照）

そして、約束を疑ってしまう第三の理由は、その約束が途方もなく遠い将来のことだからです。主は永遠の神です。ですから、それが実現するのが平気で何千年の先だったりします。イスラエルの子孫、つまりユダヤ人が今、一千万人以上いますが、そんなことになるなどと、アブラハムが約束を与えられた時、想像だにできなかったはずです。けれども、彼は信じたのです。はるか先のことも、神は約束をかなえてくださいます。なぜなら、神は永遠の方ですから、「Ⅱペテ 3:8 主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」であります。

2B 永遠のいのちを持つ者

そして、この約束の確かさをもって、神は永遠のいのちの約束を与えておられます。イエス様が言われました、「ヨハ 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。」

永遠のいのちを持つ者の特徴を取り上げてみましょう。第一に、信じる者です。「ヨハ 3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」単純に信頼する者が、永遠のいのちを、キリストにあって持ちます。第二に、忍耐して善を行う者に、永遠のいのちが約束されています。「ロマ 2:7 忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、」ですから、最後までしっかりと約束のことばを保っていることが必要であることが分かります。第三に、御霊に蒔く者です。「ガラ 6:8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」御霊に属する事で自分自身を養うのが、御霊に蒔くことです。御言葉に触れる、信仰的に建徳になることを聞く、祈り合う、賛美をすること、また善を行うことですね。第四に、神を知る者は永遠のいのちを持っています。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

3B 長さ以上の命

こうやって見ていると、永遠のいのちが単に生命が永続するようなものではないことが分かるでしょう。量よりも質です。いのちが与えられている、生きているということ。その内実がもっと大切です。実に、御子と御父に留まっていることこそが、永遠のいのちだというのは、神にある命を私たちが得ていることことそのものが、永遠のいのちです。ダビデが詩篇で、とこしえの命の道をこのように表現しました。「16:11 あなたは私にいのちの道を知らせてくださいます。満ち足りた喜びがあなたの御前にあり楽しみがあなたの右にとこしえにあります。」満ち足りた喜びです、神の前における楽しみです。それが一時的なものではなく、永続する楽しみです。